慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵巻子本[花鳥風月]解題・ 翻刻
Sub Title	Bibliography and reprinting of "Kachofugetsu" owned by Keio University Library
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.72- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵巻子本［花鳥風月］解題・翻刻

石川　透

解題

室町物語『花鳥風月』は、花鳥と風月の二人の巫女が、在原業平や光源氏等の霊を呼び出し、扇の絵が誰であるかを論争し合うという興味深い物語である。『伊勢物語』や『源氏物語』等の古注釈書類が利用されており、室町物語の成立を考える上でも重要な作品である。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』一九八二年八月）によれば、古写本としては、高安六郎旧蔵文禄四年（一五九五年）写の奈良絵本（『室町時代物語大成』三等に翻刻）や、慶應義塾図書館蔵［室町後期］写の奈良絵本（極め「扇合物かたり」『室町時代物語大成』三等に翻刻）が知られている。

ここに紹介する巻子本は、貼り合わせの順番が乱れ、巻頭が欠けてはいるものの、室町末期の古写本として重要な位置を占めるものである。

なお、『花鳥風月』については、拙稿「室町時代物語における『伊勢物語』享受」（『室町文学纂集』Ⅰ、一九八七年九月）に少し記している。御参照願えれば幸いである。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館
番号、一三二X—五〇—一
形態、巻子本、一軸
時代、［室町末期］写
寸法、縦一五・九糎
表紙、黄土色裂表紙（後補）
外題、ナシ
見返、金砂子散らし斐紙（後補）
内題、ナシ
料紙、斐紙
字高、約一四・六糎
奥書、ナシ
印記、冒頭に朱印「寶玲文庫」「慶應義塾図書館蔵」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」・『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、（　）括弧は同筆による補入である。

［花鳥風月］

（冒頭欠）

さるほとに、花鳥風月きやうたい、まいりぬ。

あねは、柳うらの桜のきぬの、にほひことなるに、紅のはかまきて、たんくわの口ひるあさやかに、せひたひのまゆすみほの〳〵と、色音も深きはつ春の、初音のけふの玉さかに、ひらけそめたる花よりも、なをめつらか也。

いもふとの風月も、藤重の二重衣に、紅のはかまきて、はくせつのはたえすきとをり、玉のかんさしゆりかけて、らんしやのにほひかほはしく、さか野、原の女郎花、露をもけなるふせひにて、ゆるき出たる有様は、なにしほふ風月も、けにもと思計也。

人〳〵、是を御覧して、「あな不思議。東のをくのかたいなかにも、かゝる女房の有けるか」と、今更めをおとろかす計也。

人〳〵、おほせありけるは、「さるめひよの御事と、うけ給候間、尋申たき計て、是まて申て候」との給へは、「めひよまては候はねとも、めしによりてまいりて候程に、わか上らふ様たちの、御なふり草には、なり参せんするにて候。

何事にても候へ」と申ければ、なりひらの方の人〳〵、申されけるは、「此かん〳〵の尋申人は、この世にある人か、なき人か。名をは何と申。男か女房か、委しくうらなひ給へ」と申されければ、あねの花鳥、「承候」とて、冊尺一とり出て、つく〳〵とまほり申やう、「『あらおもしろの御うらや。名はいにしへにならの葉の、こすへの露のたまさかに、跡とふ人もなき物を、なにしにたつね給ふ覧。われは是、けんよく三年九月二十三日に、たんしやうして、しゆんわ、にんりやう、もくとく、せゐわ、やうせゐ、五たひのてうに、つかへたてまつり、くわんちやうくわん年正月二十一日に、年五十六にて、むな敷なりし物、あとなり』と、御うらのをもてにみえて候。これは、うたかひもなき、いにしへのなりひらの御事を、御たつね候御心あてにて候けるや覧」と申ければ、人〳〵、是をきゝたまひ、めとめを見合、余に不思義にて、「いや、是は、御空事にて候。なにしに、今、なりひらの御事を尋申へき。能〳〵、御うらなひ候へ」との給へは、花鳥、此由き〳〵たまひ、「ちかひ候まし。なをなをも、不心におほしめし候はゝ、わらは、あつさにかけて、こたへ申さん。ふう月、とひてに成て、とい給へ」とて、あつさのまゆみ、うちならし、「一しゆの歌にかく計、

おもふ事いはてたゝにややみなまし
我とひとしき人しなければ

そも〳〵、われは、これ、かんれゐわうの、まめおとこのなをゑて、一せうかいのうちに、ちきりをむすひし人の数、三千三百三十三人なり」。

そのとき、風月、「わらは、たつねてに成て、人〳〵に、きかせまいらせ候はん。さても、五てうのきさきと申せしは、たれ人そ」。「かんいんのそう大しやう大しん、（ふゆつくこうの御むすめ、にんめう天わうのきさき、御とし二十

八、なりひら二十二にて、はしめてあいたてまつり候」。
「そめ殿、きさきは、たれ人そ」。「大しやう大しん、）よしふさの御むすめ、もんとく天わうのきさき、みつのをの御かとの御は、、これなり」。
「さて、二条のきさきと申て、あつまのをくまてぬすみとり、ことに、御身をくるしめしは、たれ人の事やらん」。
「あら、なつかしの人の名や。うれしくも、尋給ふものかな。それこそ、中なこんなりよしの御むすめ、せいわ天わうのきさき、御とし十五、なりひら二十二にて、いまたた、人にてをはせしとき、忍〳〵にちかつきたてまつり、ある時は、をにひとくちに、おそろしきめをみ、またある時は、むさし野を、けふはなやきそと、もの、ふをうらみ、すみた川にては、都鳥にことをとい、うつの山にては、人に言伝をし、そくはくの心を尽せし人の御事なり」。
「さて、いせさい宮の御事は」。「あな、事もかたしけなや。もんとく天わう、たいこの御むすめ、かたしけなくも、いせさい宮のねうこにて、わたらせたまいしを、ちやうくわん十ねん、なりひら、かり野、つかゐのとき、はしめてあいたてまつり候。かへるあしたのことの葉に、

きみやこし我や行けむをもほへす
夢かうつ、かねてかさめてか

とありけれは、返事に、

かきくらす心のやみにまとゐにき
ゆめうつ、とはこよゐさためよ

と申せしも、かたしけなや」。

「さて、かさりちまきのねうはうは、たれやらん」。「それこそ、あにゆきひらのむすめ、さたかすのしんわうのは、にて候」。

「さて、へんの宮す所ときこえしは」。「ひろよしの御むすめ、にんめう天わうのみやす所にて候」。

「なま心あるねうはうなときこえしは、たれ人の事やらむ」。「それこそ、その比、てんかにならひなき色このみ、てわのくんし、おの、よしさねかむすめ、こまちか事にて候」。

「きつにはめなてとわひしねうはうは」。「みちのくのかみ、さかのうゑのつらをかむすめ」。

「また、そめ川の女はうときこえしは」。「ちくせんのくに、あをきかもと、しなかわらちかむねかむすめ」。

「つくもかみの女はうは、いかに」。「ちふのせう、藤はらのさたなつかきうさいなり」。

「さて、よ人はたれそ」。「それこそ、いせか事にて候。この外、かす〳〵あまたおをけれと、ことしけけれは申まし」。

「をよそ、この人〳〵の御事は、せんきまち〳〵にして、いゑのくてん、ひとつならす。いつれのいゑをか、もちい給ふへき」と、ねんころにもんたうしけれとも、人〳〵、なをもかくして、なりひらとものたまはねは、「いや〳〵、さのみな御かくし候そ。御このほねおりに、はや〳〵、あかさせ給ふへし」。「まさしく、御心のうちに御たつね候人は、なりひらの御事を御たつね候へるこそ、かやうには申候へ、しんしつもとめ給へる人は、なりひらにてははんへらす。人たかへにて候へし。御うらのをもて、あつさの所に、あらはれいてたまゐ候へし」と申けれは、人〳〵、これをき〳〵たまい、ふしきさ、かきりなくて、めと目を見あわせ、したふりをしてこそをはしけれ。

さて、源氏のゑといひし人、すゝみ出て申されけるは、「御うらの、あひあはぬ事は、さてをきぬ。言語道段聞事に

てこそ候へ。それかし、又、いと尋申度事候。是、かまえて〳〵、懇に御うらなひて給候へ。人たかえは、いかやうの人、きたり給へるそ。能〳〵不心をはれ候様に、てふもん申候はん」とのたまへは、「誠、御大事を御尋候はゝ、われら、御かゝみを、しんきやうと、あかめたてまつりて、もちて候。此御前にて、いきりやう、しりやう、にんけん、ちくるひ、仏神、三法、何にても、あらわれすと言事なし。御尋候人を、唯今、此鏡に祈りうつして、人〳〵にみせ申さん。先、たねん、きやうりきをいれたてまつる、しんきやうの御前にて、かゝみのきとくを申さんするにて候。そも〳〵、われは是、しちうつし給ひしより此かた、しんきやう、いくわうほからかにして、せよくせのやみをてらし給ふ物をや。とをく、しやうこをあんするに、くわうていをかけて、つゐに、しゆふをしたかへ、たうのたひそうは、人を以かゝみとせしゆへに、日本みな、しちとくのほまれをうかひき。あほうきうに、たてしかゝみの、すいとさんのふかきをしれるなり。たれか、鏡をしやうせさるへき。しくさんに、きうゆうあらはれす。かのやうめいせんしは、しんきやうのろくをあつめて、心をめうきやうのうてなにたとふ。

年をへて花のかゝみとなる水は
ちりかゝるをやくもるといふらむ

不思義やな。かのむらさきのうへの、すまの別をかなしみて、『かゝみをみても、なくさみてまし』と、よみたまひし古のことのは、ふとうかみて候。あはれ、ひかる源氏の御事を御尋候にこそこさんなれ。なを〳〵せい〳〵をいたし、いのりあらはし申さんするにて候。それ、めうきやうにてらさすして、せゐすいに、かゝみをみるに、これ、よくみかけると、すめるによつてなり。こゝに、われら、きみやうのたな心をあはせて、けいしゆとうやまゐ、さいはゐ〳〵」とふしおかみて、申て申さく、「ねかはくは、はやく、一めんのかゝみのかけに、只今、たつね給ふ、はうれゐのかた

ちをあらはして、立所に、しよ人のふしんの、あきらかに見せ給へ」。「しかれは、すなはち、たつぬるところの、むかしかたりは、かたしけなくも、しんむくわうていの御するゑ、ちせゐふさうのけんくんの御名をは、わさと申まし。かの物かたりにも、『いつれの御ときにかありけん』と、つくりくたりぬる事なれは、さうなく、いかてかあらはさん。なをも、ふしんにおほし候はゝ、我身を、ひかるけんしのありさまに、いのりなして、かゝみのかけに、いのりうつして、人〳〵にみせ申さん」とて、「くもかくれせし夜半の月、ひかりをまたやあらはさむ」と、をし返し〳〵、二三へんうたいけれは、まのあたりに、あふきかけるゑのことくなる、くけ上らふの、なをしかふりちやくして、みえける事こそふしきなる。

人〳〵、きたゐのおもひをなして、みる所に、花鳥、かゝみにうつれるけんしにかはりて申けるは、「きりつほの天王第二のみこ、六てうのいんとは我事なり。たやすくなのらしとはおもへとも、くもかくれせし後は、あいへむりくのつみにしつみて、いまたうかむたよりなし。されは、ありし世の事とも、物かたりしてほろほさん。さんけのくとくによりて、すこしのつみをもまぬかれんかために、只今、かゝみのかけにあらわれむ。われはこれ、たしやうのえんあるによりてなり。かまへて、人〳〵、あととふらひてたひ給へ。さいしやうさんけ申まいらせ候。はれ、三さゐと申せし秋のころ、はゝかういにをくれたてまつり、なみたをそへて、いとゝしく、むしのねしけきあさちふに、露けきなからすこししを、こはきかもとのさひしさと、はくゝみたまいし御めくみ、いともかしこきちよくにより、けんしのしやうを給て、十二にてけむふくし、かうらいこくのさう人、こま人といひし物、ひかるといゐるなをつけしより、ひかるけんしといひしなり。はゝ木ゝのまきに、中将、もみちのかのまきに、しやうさんみ、あふひに、大将、さかきのまきに、とし二十三にて、ちゝ御かとにをくれたてまつり、かの花のえんの春のよに、行衛もしらぬちきりゆへ、とし二十

五になりしとき、つのくにすまにうつされぬ。あまのなけきを身につみて、又のとしの春、はりまのあかしにうらつたゐ、とわすかたりの夢をさへ、かたりなくさむ人もなし。さるにても、三とせはすまのうらさひしさを、なにとしはの屋の、うらもまちかきあしかきの、たけのあみ戸の明くれは、うきふしなにとすかむしろ、ならはぬひなのすまひして、人はなれなる里なれは、都のたよりもたへはてゝ、なみたにくもる月のかほ、ちいさき舟をなかめても、しほやくけふりに、身をいため、しはといふ物かりしきて、おもひをすまの山おろし、こゑ野にかよふしかのねは、うしろの山にほとちかく、なみこゝもとにふる雨は、うしほにうつる声なれや。たひころも、うらかなしくもなかむれは、あはちしま山ほのみえて、たかすむ里そまきの戸の、ちりまさりせぬすまゐまて、おもひのこさぬ事はなし。なきさのとまやにをとするは、あまのさえつりくいなの声、ひちかさ雨のしめ〳〵と、おもひの秋の色となく、をとき、なるゝたかしほの、かちめを入に過行は、せめて思ひやなくさむと、うつしうへたるわか木のさくら、さけとも花はいなかにて、すむわれさへにいつしかと、山かつめきてひな人の、忍ふ宮このかたみには、みの日のはらゐなて物、おくり物にて笛のねも、ひくたまこともなつかしや。さる程に、天下にきとくのつけありて、程なく宮こにめしかへさる。かすのほかなる大なこんにあかり、うちつゝき、身をつくしのまきに、ない大しん、おとめのまきに、大しやう大しん、藤のうらはに、大上天わう、かくたのしみをきわめしに、むらさきのうへのわかれより、光をかへすいなつまの、程なき夢の世中に、色をたしなみかほかさり、高きいやしくをしなへて、ぬしなきもぬしあるも、かくれあらわれおもひせし、女のおもひやつもりけむ、おもふ人にはとくわかれ、後の世まてもかなしむこそ、わか身なからもおろかなれ」と、かれうひんの御こゑにて、なきくときかたり給へは、みな、おもしろくも、また、あはれにも、ふしきにこそはおもひけれ。

さるほとに、いもうとのふう月、気色、少うつゝなきふせゐにて、「あれ〳〵見給へ。かゝみのかけに、わらはもあ

らはれいて候そ。はつかしや。末つむ花のかすならて、おもひや色にいてにける」と、をし返し〳〵、二三へんうたひけれは、あふきにかけるゑのことくなる女はうの、口おゝひして、けんしの御かけに立より給ふとみえしかは、かのねうはう申けるは、「きみは、いつくえとてをはするそ。この世にてこそ、うとまれまいらせ候め、めいとにては、あゐねんのおにとなつて、かけのことくに、はなるましき物を」とて、なをも、御かけにたちよりける。

さる程に、花鳥、けんしにかはりて、物をいふ。ふう月は、末つむ花のゆふれゐとなりて、もんたうしけり。

その時、大将、のたまいけるは、「そも〳〵、いかなる人にてまします。みたるともなきすかたかな。をもはゆけれはこそ、くちおゝひをはし給ふらむ。これ程、人の御らんするに、見くるしき御ふるまゐや。とく、たちさらせ給ふへし」との給へは、「われをは、たれともしりたまはぬや。御心しりの、たゆふのめうふに、とひ給へ」。「さては、ひたちの宮の御むすめかや」。「なか〳〵、わらはゝ、六てうのいんにさふらゐて、あまたの数には入しかとも、なさへいやしきよもきふの、かれ〳〵なりしちきりのすゑ、うらめしけれは人しれす、ねたき心はありしかとも、たゝ数ならぬ身にはちて、しらすかほにてさてすきぬ。たとい、しやうをへたつとも、あいねんのきつなきれされは、なをうき人につきそはん。あなはなるましの我身や」とて、なをも御身にそゐ給へは、大将、のたまゐけるは、「いせ宮す所をこそ、物ゑんしのをはせしとて、物かたりのおもてにも、うたてしき御事に申せしか、末つむ花の御事は、ものゑんしし給ふとも、かの物かたりにもみえぬものを。されは、何事のうらみにより、これまて来り給ふそや。はや〳〵、御かへり候へ」とおほせけれは、「物語にこそかゝるとも、今の世までも、末つむ花のなをもえたり。『みたるともなきすかた』とは、あらうらめしのことのはや。いて〳〵、すきたる事なれとも、物ねたみして、くるはん。あふひの上ときこえしは、せつしやうたいしやう大しんの御むすめ、ときめき給ふ御事を、めさましとのみみしほとに、夕きりの君をうみを

き、ほとなく、かくれたまひしうれしさよ。むらさきのうへと申せしは、ゆかりのくさをたつねとり、いときなきよりむかへとり、はくゝみたまひし事なれは、御心さしもたくひなし。ときめき給ふ御事を、うらやましとのみみしほとに、わかなのまきにやまゐつき、御のりのまきにうせ給ふ。世中なへてなけきしかとも、われは、それほともをもはす。あかしのうへときこへしは、中宮の、かくめてたきにつけても、あなつりにくゝ成行は、きゝみるたひにすさましや。花ちるさとゝ申せしは、れゐけいてんの御いもうと、いとかすかにてましませは、我身はしられいとをしや、とはおもひしか、よかれとまてはをもわれす。六てうの宮す所と申せしは、ものゝけにあらはれて、よろつの人のあたとなる、心ふかさもおそろしや。なにとおもふとこの人を、にくまていかゝあるへき。女三の宮は、ちゝ御かと、ことにかなしくしたまゐて、かのうき人にゆつりしに、ゑもんのかみのおもふ事、けふりくらへにあらはれて、御心にも入されは、人にはいはす、心にはをかしときゝて、さてすきぬ。御まゝはゝのふちつほと、おほろ月夜の御事を、おもへはことにくけれと、いひちらさんもなさけなし。さすかに人の御ためも、いたはしけれは、よかたりに、人もこそきけ申まし。なかにも、物ゝにくかりしは、たまかつらのないしは、夕かほの御むすめ、御まゝむすめ成しを、夜は夕やみの比かとよ、かゝり火すこしともさせて、引さすことをまくらにて、御うたゝねのつきなさよ。うつせみのあま君、かすにもあらぬ人たにも、さるそときけは人しれす、しつとのこゝろ、ほのをとなりてむねをやき、あゐねんのきつな、身をこかす。又、うちかへしあんするに、物のねたきは誰ゆへそ。よし、なに事もうちすてゝ、うらみは末もとをらしや。せめてかゝみのかけにても、恋しき人をみるやとて、鏡によりてかけみれは、あたりもひかる御かけに、また我かけをならふれは、すゝけあかめるこうちきの、ふるきのかわきぬうへにきて、ふけんほさつののり物と、かきとゝめられし筆のあと、いま身にしれてはつかしや。この日ころ、あゐねんのきつな、おもひきり、しんとの心をひる返し、す

きにしかたの事ともを、われとこゝろにさんけして、くわうくわいのなみた、せきあへす」、袖をかほにをしあてゝ、申けれは、大将、の給ひけるは、「やさしくも、おほしとりける物かな。そも〳〵、御身をはたつね申人もなし。なにしに、これまてきたり給ふらむ」。

「いまた、しりたまはすや、たゝいま、ふしんをなすあふきの絵に、いつそや、雪のあした、御かへりのとき、まつのゆきをはらわせて、

ふりにけるかしらのゆきをみる人も
をとらすぬらすあさのそてかな

とよみたまいしとき、わらはも、みすちかく、さそはれいてたりし所を、かきたるゑにてさふらへは、此物かたりをたよりとして、日比のうらめしさを申なり。これまてなれや、人〳〵、いとま申てかへるなり。たゝいまの物かたりは、さいしやうさんけまいらせ候。あととふらゐてたひ給へ」と申けれは、かゝみにうつりしかけもなく、風月も、もとのすかたになりて、夢のさめたることくなり。

人〳〵、きとくのおもひをなしてみる所に、けんしの御かけは、かゝみにあり。花鳥、ゆふれゐのきたるふせゐもなかりけれは、はむろの中なこん、すゝみ出て申されけるは、「ありかたき御ゑんかな。此あふきのふしんにより、むかし語(かたり)の御すかたを、をかみたてまつる事、たしやうのえんなれは、御ほたゐ、ねん比にとふらゐたてまつるへし。くはしく御物かたり候へ」と申されけれは、「やすき事なり。なに事にても、たつね給へ」とその給ふ。

「そも〳〵、かの物かたりには、ていわうなん世のこともあかせるそや」。

こたへていはく、「まつ、せん代の御ことはさてをきぬ。きりつほの御かとよりはしめて、しゆしやくいん、れいせ

むいん、今上、春宮、五たひなり」。

「御したゐにふしんあり。まつ、しゆしやくいんの御はゝは、いかなる人にてをはしけるやらむ」。

「二てうのくわんはくあく大しんのむすめ、こうき殿ゝ大きさいの宮、これ也」。

「れゐせんいんの御はゝは」。「せんていの四の宮、うすくものねうゐんとも、藤つほのみやとも、かゝやくひのみやとも申なり」。

「うち十てうの事は」。「われ、ひかりかくれしのち、にほふひやうふ卿の宮、かほる大将の事、つくりそへたるをよそゑて申へき。人にまつ、

きりつほの　秋をおもひの　はしめにて　なをのみ残す　はゝ木ゝの　心もしらて　たひねせし　君はなみたの
かたたかゐ　おもひこりても　さてあらて　なを人からそ　なつかしき　かたみのそてを　またぬらす　夕かほの
末はの露を　きゝしより　人のいのちは　おひたるも　わかむらさきも　たのまれす　心おさなき　はくゝみも
みるかゐありし　さまなれや　せゐかの　まゐ人の　たちいにつけて　わすれぬは　もみちの賀の　御あそひ　こ
ゝろにかゝる　藤つほの　あたりゆかしき　花のえん　かもの御あれの　あふひくさ　くるまをかさる　あらそゐ
も　のちは夢とや　成ぬらん　かの野ゝ宮の　たひところ　一えた折し　さか木はの　なをなつかしみ　吹かせの
花ちるさとを　すきぬらむ　なをこりすまの　およひたけ　雨はまかきの　なかにして　夜もすから　月にあかし
の　うらつたゐ　なを身をつくし　思ひ行　ひたりやみきの　ゑあはせに　あらそひ　さはくまつ風の　きえてま
た吹　うすくもの　けふりのはても　あはれなり　世をあさかほの　花の露　なをなつかしき　をとめ子か　かた
みに残す　たまかつら　我身にとむる　むめかへの　藤のうら葉も　ときすきぬ　はかなも老と　成ぬへし　われ

さきたらは　なきあとを　とへかしわきの　はかなくも　夢につたへし　よこふへを　ふきよわりたる　山かせに

夕霧はるゝ　小野ゝ里

そも〳〵、けうしゆしやくそんは、御のりの道を尋つゝ、夢まほろしの夜半の空、ついに、ねはんのくもかくれ、いさもろともに、さいしやうの、くもあつくして、やみはれて、心の月をあらはさん。うれしきかなや、只今、きやうけむきゝよのたはふれに、花鳥風月をえんとして、むしやうほたひにいたりなく、しやうしそくねはん、ほんなうそくほたひとも、いまこそ、おもひしられたり。いとま申て、人〳〵」とて、花鳥、さしきを立ければ、かゝみにうつりしかけもなく、御こも、もとのすかたに成にけり。

これをみきく人〳〵、ゆめまほろしの心ちして、うつゝとも、さらにをもはれす、おもしろさといひ、一かたならぬふしきにて、人〳〵のほとゝゐさんたん、なのめならす侍りける。こ袖十かさね、こかね十両たまはつて、御こは、まかてけるとなん。ほんのまゝ。